

第 1 回 郡山市まち・ひと・しごと創生総合戦略有識者会議

議事概要

日時：平成 27 年 6 月 12 日（金）

13:30～15:30

場所：郡山市役所西庁舎 5 階 5-1-2 会議室

○開会

○市長挨拶

市長） 本日はご多用のなかお集まりいただきありがとうございます。通常、市長は挨拶のみで退席するのが定番ですが、はじめに私の存念を申し上げたいと思います。結論から言うと三森先生のような方に増えてほしいというのがまち・ひと・しごとの目指すところだと位置付けている。

ドイツにアディダスとプーマの本拠地アディプー村（正式名：ヘルツォーゲンアウラッハ）という人口 5 万人の村がある。両社とも世界的企業だが、ヨーロッパでは半径 500km くらいの範囲を営業圏と考えるようだ。郡山から 500km だと静岡まで入る。郡山は新幹線駅があるが、今はインターネットもあるのでこうした文明の利器を使ってまち・ひと・しごとを郡山でどうやって広げていくかということが課題となっている。

つくづく思うのは、日本の行政はお節介だということ。全国市長会で他市の市長と「権限移譲があれば権限返上もあっていい」という話をした。私の好きなモンゴルの宰相、耶律楚材の言葉に「一利を興すは一害を除くに如かず。一事を生(ふ)やすは一事をへらすに若かず。」というのがある。何かを為すには目新しいことをやるよりも問題を一つ取り除いたほうが効果がある、という意味だが、現代の行政にも言えること。国は次々新しいことをやろうとしているが、それをやる人は生産年齢人口が減っていてどこにもいないということになっている。昭和 20 年代に作った制度につきはぎしてきたのが今の日本の制度。余計なものを取り除かないと、現在の人口情勢のなかでまち・ひと・しごとを作ることも難しくなっているのではないか。市の行政でやらなくてもいいようなことがあればご指摘頂きたい。

郡山市は最近水害サミットとか 2020 東京オリンピック・パラリンピック競技大会を活用する都市連合というものにも参加しており、新幹線駅サミットにも参加しようとしている。こうした都市連合の動きはある都市が一人勝ちするのではなく、都

市同士が連携していこうという流れ。郡山市は連携中枢都市の指定を受け、圏域の中心都市として圏域全体で共存共栄を図ることを目指しており、まち・ひと・しごと圏域全体のことを考えた構想を目指したい。もうひとつ、震災を受けて福島県内のJAが4つに統合再編され、郡山・いわき・田村・双葉のJAが統合される動きもある。長期的には2025年問題（団塊の世代が後期高齢者になる）というものがある。まち・ひと・しごとは5年後、10年後を視野に入れて検討していく必要がある。

ビッグデータ等も活用してデータに基づく議論ができるように、材料を提供しながら進めていきたい。

○座長指名

市長） 座長については内藤委員に、座長職務代理者については上田委員にお願いしたい。

○座長挨拶

内藤） 市長の挨拶を聞きますと溢れるように宿題が出ており気が重くなるが、皆さんの協力を頂いてなんらかの回答を出せるようにしたい。

まち・ひと・しごと創生という言葉も難しいが、福島県は震災後通常の十数年分にあたる若年層を中心とした数万人の人口減少があった。若者に戻ってもらうことや人口が減らない賑わいづくりが課題となる。多彩な論客が揃っており、まとめにご協力いただきたいが、議論については活発に行いたい。発言せずに帰るといったことがないようにお願いしたい。

（一同拍手）

○委員紹介（略）

○事務局紹介（略）

《議事》

座長） 語っていただかないと何も始まらない会議なので、なるべくご発言頂きたい。議事に入る前に、当会議の公開非公開について。

事務局） 会議の公開非公開についてはそれぞれの会議で決めることとなっており、特別な場合を除き原則公開としている。

座長） この会議は公開としてよろしいか。

（異議なしの声あり）

座長） では公開とさせていただきます。

○人口ビジョン・総合戦略について

事務局) 資料説明 (略)

スケジュールの都合から第2回会議の前にアンケートを配布する必要がある。委員の皆様には発送前に調査内容について事前にメールか郵送で意見照会を行う予定。

○質疑

座長) 資料説明に対して質問等あれば。

松原委員) 連携中枢都市圏について。担当部署はどちらか。

事務局) 同じく私どもが担当となる。

座長) 意見交換に入ります。今回は初回ですので、委員一人一人から郡山が目指すべき方向性などについてご意見を頂きたい。名簿順に1人5分以内でお願いしたい。

大和田野委員) 住み始めて1年半しか経っていないので、的外れかもしれないが意見を述べさせて頂く。資料3の6つの観点は必要な機能であり、産総研としては2番目の「人の流れを作る」拠点として企業の誘致とかに使っていただけるように、情報発信を通じてアピールしていきたい。個人的に郡山市に人が集まって定着するにはどうしたらいいか考えてみたところ、東京圏の人に「住んでみたいな」と思ってもらえるようなアピールが必要。

一つ目は「地の利」を最大限に活かす戦略が必要。東北の中では最も東京圏に近いこと、連携中枢都市という位置付けを生かして周辺市町村の資源を活用する。そのためのインフラ整備に力を入れる。

二つ目は「文化活動」。アートや演劇、食文化など。「楽都」という位置付けをもっと伸ばしていくのであれば音楽祭とか音楽フェスのようなもので全国的に知られるとよい。音楽イベントによる成功例は外国だとエジンバラやサンタフェなどの例がある。住みたくなる都市づくりのためには産業振興も必要だがこうした文化活動の振興も効果的。

座長) ありがとうございます。「住みたくなるまち」いいキャッチフレーズになるかもしれない。

大和田野委員) 付け加えますと、安積疏水の歴史というのはその開拓者精神も含めて財産だと思う。住んでいる人にはわからないかもしれないが、外から来た人にとっては心強い精神性だと思った。これもアピールしていきたい。

座長) 郡山市都市計画審議会で「歴史を大切にしたい躍動感あるまち」というキャッチフレーズがあった。続いて小川委員。

小川委員) テーマが大きいのでどこから話せばよいか。資料3の6つの項目は一つひとつ見ているとなるほどと思うが、6つが連携していけばよいと思う。パッと見た感じ相互の繋がりが見えないという印象を受けた。地元の企業としては仕事づくりや人の流れづくりに目がいくが、創業者育成や経営革新支援事業というものがあって、市としても起業者への支援に取り組んでいると思う。震災後に経済特区指定をとい

う話があって署名したが、その後どうなったか。優遇措置や移住支援などの効果的な支援があればよいと思う。

以前私が住んでいたフィラデルフィアという街では、街の中心部の人口構成を変えるために、郊外に住んでいる引退した裕福な人たちを街に移住させるために、都心に不動産を買うと税の優遇が受けられるというような対策をとっていた。郡山市として若い人たちに住んでほしいのは分かるが、若い人に限らず郡山市に住むことの魅力について発信していった方がいい。先ほど「楽都」という話があった。最近では田舎の方でも夏フェスなどの音楽イベントがあるが、郡山は交通の便がいいのにそういうイベントがないので残念。

現在郡山市に住んでいる人たちが郡山のよさに気づいて満足することで自然と郡山の良さが伝わるのではないか。

座長) ありがとうございます。若者にだけアピールするのではだめというのは新しい視点かもしれない。続いて小松委員。

小松委員) 福島大学のうつくしまふくしま未来支援センターで食の復興支援を担当している。専門は農業経営学で、放射性物質対策や安全な農水産物をどう PR するかという業務に当たってきた。この会議では農山村の活性化や都市農村交流、食農関係のビジネス振興、食農教育の観点から発言させて頂く。

郡山市と本学は食農関係の連携協定を結んでおり、農家との協働も進めてきた。震災後、郡山でも農家自ら主体的にブランド化に取り組んできた。震災で一時途切れてしまった都市農村交流を地域の若手が自発的に再開させてきた。こういった活動の芽を生かして市としてどのように取り組んでいくかが課題。今回のような戦略を立てるにあたっては、まずは主体的に動いている方から学んで、地元の農家や住民にとどまらず都市住民も含めてそれぞれの動きをどうネットワーク化してサポートしていくかという観点から考えるのが重要。地域外との関係に関しては、以前であれば「移住者を増やす」という活動が主だったが「交流人口を増やす」ことで、ライフステージの変わり目で移住を考える人が出てきたり、都市に住みながら地域の農産物のファンを増やしてくれたりといった数値化はしにくいけど想定もしていなかった幅広い効果が出てきているということがある。そうしたことも踏まえて戦略を立てていきたい。

座長) ありがとうございます。続いて佐藤委員からお願いします。

佐藤委員) 少子高齢化の流れはそう簡単には変わらない。内閣府のアンケート調査では東京在住者の約4割が地方移住を希望しているということで、特に30代から50代の男性にその傾向が強いという。そういった方には是非郡山にきて欲しい。アンケートでは移住にあたっての不安として「働く場の確保」が挙げられているが、産総研で再生可能エネルギーに関して新技術の発表があったが、関連産業が近くに立地すれば働き口の確保に繋がる。もう一つ、ワインの一大産地を目指すという動きもあ

るが、ふくしまの農業の六次産業化の流れも活かして雇用創出に繋げたい。移住に当たっては公共交通機関の利便性も求められるが、郡山市は東京と時間距離が近く、東北と関東の結節点だということをPRしていきたい。郡山は明るい要素が沢山ある。

座長) ありがとうございます。郡山と東京は近いが、郡山と産総研がもっと近くなるといい。

(一同笑)

佐藤委員) そこは公共交通のアクセスを改善していただいて。

座長) 続いて首藤委員。

首藤委員) 郡山市内で12年ほど前から学童保育を始め、その後NPOに改組して子育て中の親子が望んでいることに取り組んできた。今回はそうした実績から子育て中の親子のためにできることについて考えて発言したい。今回資料を読んで思ったのは郡山というのは魅力的な街であるということ。郡山というのは自然が多い割にお店も多くて買い物の便も良くイベントも多い利便性の高いまち。都会から来たお母さんに聞くと、車で買い物に行っても渋滞や駐車場待ちが少ないし、子ども連れで通勤列車に乗る必要もなくて住みやすいという声を聞く。これからは「住んでみてよかった」という人だけでなく「住みたい」という人を増やしていかなければならない。他県から移り住む、父親が外に転勤になっても家族は郡山に住み続けるといったまちを目指していったら良いかと思う。

これまでは行政主導でハコモノを整備する施策に傾きがちだったが、これからは住んでいる人たちが充実したライフスタイルを送れる仕掛けや仕組みを作っていくことが大事になってくる。子育て中の家族のために必要なことを考えると、まず必要なのは働ける場だが資料で挙げられている全ての分野が関わってくる。最近感じているのは、子育て中のお母さんには収入のためだけでなく社会参加としても働ける場が必要ということ。子育てだけしているとこれまでのキャリアも活かせないし悶々としてしまう。例えば我々のNPOでは託児施設にお金を払ってでも、子供が幼稚園に行っている間だけでも、特定の曜日だけでも働きたいというスタッフがいて、そういう人たちは生きいきと生活をしている。子育て中の母親でも社会参加できるまちであつたらいいなと思う。子育て中の母親は孤独を感じており、助けが必要なときに相談する相手がいない。母親同士が交流できる場があれば子育てがしやすくなる。郡山は建物とか交通は整っているので、次のステップとして人が住みやすい仕組みづくりをしていただきたい。

座長) 子育てしやすい環境が整っているので「住みたくなるまち郡山」を目指すというイメージを持てば良いのかと思う。私も孫育て中なのでよく分かる。続いて竹内委員の代理で佐藤さん。

竹内委員代理佐藤) 金融機関の立場から意見を申し上げる。東邦銀行は福島県を基盤とした銀行。数年に一回金融庁のヒアリングを受ける際に郡山市はどんな街かという

話をするがその際はまず初めに「首都圏から 200km 圏内で土地の値段も首都圏より安い」という話をする。在京福島県経済人の集いという会に出たが、福島県出身者の経済人は多いのでそうした繋がりを活用できればと思った。郡山市は、福島県の経済の中心地であり、銀行として営業に注力している。本行では今年2月に「地方創生サポートチーム」を設立したので、今後は企業の立地や産業集積、農業の六次産業化などの面、PFI や PPP の面でのサポートもしていきたい。また、移住促進ということであれば住宅取得にあたっての金利優遇などのサポートもしていきたい。

座長) 東邦銀行は創業者支援のファンドもお持ちだと思うのでよろしくお願いします。続いて丹野委員。

丹野委員) 私は日本海 LNG の専務をしておりますが、元々は日本政策投資銀行におり全国を転々としてきました。その中で郡山というのは恵まれたまちであると感じており、行政もあまりやることはないのではないかと思います。ただ、市民や行政の人たちに自分のまちに対する自信や誇りがあまりないように感じるのが残念。メディカルクリエーション事業や再生可能エネルギーの面などで郡山は進んだ都市だが、一般市民はそのことをほとんど知らない。産総研の協力をいただいて市民講座を開くなどの取り組みをするなど、市民を巻き込むような施策展開が必要。長野県飯田市でやっているような再生可能エネルギーのモデル地区などの取り組みも考えられる。

郡山市は進取の気性があるまちなので、新しいことにどんどん取り組んで、それを発信して郡山市に住んでみたいと思われるようにしていきたい。

座長) ありがとうございます。では農業者の立場から藤田委員。

藤田委員) 農家の8代目で6歳と3歳の子どもの親でもあり、また大学院生として小松先生のお世話になっている。郡山市はすでにいい環境にあるので必ずしも新しいことをやる必要はないという前提で3点申し上げたい。

一つ目は「郡山のいいところ、課題を洗い出して整理すること」が必要。

二つ目は「洗い出したよいところや課題を分野の垣根を越えてマッチングしていくこと」が大事。例えば、うちの地域には学童保育がなくて学童保育を始めようにも人手がなくて困っているが地元の神社は神楽の後継者を育てたいという話があって、神社の方で週何回か子どもを預かって神楽を教えるという形でマッチングができた。この活動の中で地域の歴史や安積疏水の開拓者魂を子ども達に伝えることもできる。私の友人で南三陸出身の方に聞いた話ですが、南三陸には地元の歴史に詳しい漁師がいて、なぜ詳しいのか聞いたら学習発表会の劇で自然と覚えたという。例えば安積開拓の歴史を「楽都」郡山らしくミュージカルにしたらどうか。

三点目は「外からの視点を大事にすること」。この前、中央公民館で転入者の方向けに野菜ソムリエとして講座をさせていただいたが、転入者の方から「郡山市は他の地域と比べて公民館の講座が充実している」と言われた。そのような視点は住んでいる人には分からない。柏屋の隣で「開成マルシェ」という福島の農作物を販売

するイベントをやるが、そこにわざわざ東京から交通費をかけて通ってくる人がいて、理由を聞くと「この空間は他にはないから」と言われた。そういうことをつきつめていくと我々が知らなかった魅力や課題が見えてくるのではないか。

座長) ありがとうございます。次は松原委員。

松原委員) 福島民友新聞社の松原です。国のまち・ひと・しごと創生会議に参加していた慶応大学の樋口教授にセミナーで話をしてもらったが、そのなかで「社会増減は地域の所得格差に比例しており、地域で魅力的な雇用機会を作ることが大切。安定した収入がなければ人口定着につながらない」といった旨の話をされた。その通りだと思う。郡山に住みたいと思っても生活できなければだめ。高収入でなくても普通に生活ができる、子どもを育てられる収入が得られなければ暮らしていけない。その支援ができるかどうか。

私は郡山市の産業競争力政策会議の委員もしているが、やっていることが重複している感じがする。市内でも方向をまとめて計画を作った方がよい。いろいろな行政計画があるが整合をとることが必要。郡山のように医療関係の研究機関があるまちはそうはないので、関連産業を誘致できれば働く場も増える。これまで県内各地を移り住んできたが、郡山は県内で一番ポテンシャルがあると思う。他の地域から羨ましがられるようなポジションにあって何ができるかということこれから皆さんと検討していきたい。

座長) 機能が重複しているという感想は私も持ったが、法律の関係もあるのでやむを得ない面もある。続いて市長から住んでほしい人ということで指名があった三森委員。

三森委員) 資料3の6項目に共通しているのは「人」。戦後の記憶を辿ってみるとだんだん豊かになってきたと感じている。そうした経験を踏まえて仕事づくり人の流れということを考えれば、人が集まってくるから魅力ができるのであって魅力だけでも長続きしない。生活面でなく精神面でも安全安心できることが大事ではないか。ニュースでは危険な事件のことをよくみるが人間形成の上でよくないことだと思う。東京の中野によく行くが、若い人が増えたと思ったら明治大学ができたということだった。若い人を呼び込むのであればそういうものを作ればよい。

郡山を外から見ると地の利はいいし農産物も美味しい。海も山も近くて食べ物も美味しい。これは素晴らしいこと。新しい何かを作っていくのではなくて今あるもので使われていないものが相当ある。そういうものを使って人を呼び込むことができなにか。

自分も高齢になりつつあるので健康に不安がある。歳をとった人にとっても暮らしやすいまちであることも魅力として発信できればと思う。地の利があるので自分が施設等に入所しても子が訪ねやすいということもある。廃校等を活用すれば高齢者向けに新しい施設を作る必要はない。使われていない施設があれば手を加えて使っていくようにできないかと思う。

結婚・出産・子育て支援ということだけみると女性への支援に偏りがちだが、子育ては近くにいる全ての大人が関わることではないかと思う。社会全体でみて、ハード面は整ってきたので次はソフト面や心の充実が求められる。人が生きて行く上でお金だけあれば幸せかというとは決してそうではなく、やりがいや達成感を感じられるようにするためには文化の側面も必要。郡山はかつて東北のシカゴと呼ばれていたが、今はウィーンになってきた。郡山は湯浅譲二という音楽家を輩出している。作曲のコンクールをやればよいと提案したことがあるが実現しなかった。そういうことも一案。震災の経験から生きる知恵の大切さを学んだ。知恵というのは経験者から聞かないと分からない。聞いて見て体験することでしか知恵は身につかない。震災の経験を伝えていくことも大事。

座長) 詳しくはこれから深めていきましょう。続いて本部(もとべ)委員。

本部委員) 二つの立場からお話をしたい。7年前から福島県内各地で六次産業化の支援を行っており各地を回っている。また16歳から20数年社長をやっている。経営者の立場からも話をしたい。郡山市の六次産業化に関しては地方創生の中でメインにするほど強化の必要があるとは思っておらず、農業よりも商業の方に重点を置いて支援をしている。

十代の時に起業した経営者として他県から来て郡山の人を雇ってみて思ったのは首都圏に近いこともあって最低賃金が高い割に仕事のスキルが追いついていないということ。私の地元の鹿児島県の人たちは福島よりも低い賃金で同じ仕事をしている。郡山は商業のまちなので、地域の経営者にはそれに見合った経営努力をしてもらってそれに合わせて従業員のスキル向上に繋がればよいと思う。郡山は交通の便がいいという話があったが、郡山といえばこれというものが他になかなか見えてこず、地元の人も見えていないと思う。ブランド力の向上が必要かと思う。郡山の人には新しいものを好む傾向があつて前向きでいいのだが、新しいことよりも長く続けることを目指してほしいと思う。

アンケートを実施するという話だったが、行政のアンケートは、回収率は3割程度あればいいと思われがちだが、3、40%と言わず、できる限り高い回収率を目指して意見を反映することを目標としてほしい。

座長) ありがとうございます。最後に吉田委員お願いします。

吉田委員) 何人かの委員からも出たが、30数年住んでいるがやはり郡山は商業都市という印象を受ける。商業都市であるにも関わらず長く商売が続かないということが課題。郡山市は震災の影響もあり若い人がどんどん出て行っている。震災前までは郡山市の人口は微増傾向だった。十数年前大学誘致の話があつたし期待もしたが、外国の大学の日本校が来て何年後かには廃校になった。郡山の若い人が市外の大学に入ったまま戻ってこない現状を見れば市内への大学の誘致は有効。

郡山市にはカルチャーパークという遊園地があるが、できた当初は人が集まった

がリピーターが獲得できなかった。那須ハイランドパークくらいの魅力のある施設でなければ人は集まらない。作った方がいいがすぐ閉鎖されるのでは仕方がない。もっと人が集まる施設にリニューアルする必要がある。野球場ができてプロ球団が来るようになったけど年に2、3試合しかない。福島県内から人が集まるようなイベントを開催できればいいのだが。

郡山でB-1グランプリを開催したが、あの時の郡山駅の西口と東口の交通量の違いがすごかった。普段から西口の交通量は多いが東口は交通量が少ない。西口と東口の連携をよくすることによって交通の流れが改善できると思う。東京に近い郡山という話があったが最近福島県内の若者は高速バスで仙台か東京の新宿に買い物に行ってしまう。勿体無い。

座長) 意見交換の時間を取りたい。まず、経済特区の指定を受けて法人税免除を受けようという話で署名運動をやったが、国は首都圏の本社機能を地方に移転したら法人税を免税するという話になった。金はばらまけないから会社をばらまくという話になった。地方に人口を分散させようとはしているが、それにキャッチアップするのが地方創生なのかどうかは分からない。個人的には郡山市のランドデザインは国からこういう制度をつくったからやれと言われてやるものではなく自らやるべきもの。本部委員が言われたように「郡山といえば〇〇のまち」と決めるべき。音楽のまちなら音楽のまちで徹底すべきで、二流品のメニューを並べられても興味が持てない。一級品でなければならない。震災の後に福島再生のために必要なことを議論した中で「MIT、最低でも東京大学を誘致すること」「猪苗代湖にオリエンタルリゾートを作ること」を提案した。自然を活用するエンタテインメント的な大胆な発想が必要ということ考えた。

福島大学の奥本教授は「郡山は震災前からイケてましたか。イケてないですね。」と言われた。若者や女性からみてイケてる、住みやすい、楽しい、文化的なまちにしていかなければならないということで残りの時間議論したい。

外部の方の意見は新鮮で面白いと思った。大和田野委員にお聞きしたいが、産総研は単身赴任の方が多いとお聞きしたが奥様がついてこなかった理由は何か。

大和田野委員) 学校に通っている子どもがいるので家族全員で移住できないという理由が多い。若い所員はこちらで結婚して子育てを始めている。

座長) Uターン・Iターンは奥さんの許しが出ないという話をよく聞く。郡山に住んでもいいというところまで来ているのだろうか。

大和田野委員) うちの家内はどこでも住めると言っている。単身赴任が多い理由は家を建ててしまったことだとか子どもの進学の原因などの一般的なものが多く、郡山だからどうこうということはない。

座長) そういう条件を整えないと郡山に人が住むということにはならないということか。

大和田野委員) あとは考え方だと思う。教育も医療も充実しているということはおわかっ

ていた。

座長) 娘2人が3人目の子を妊娠中なのだが、3人目ともなるとベビーシッターがいないと大変。合計特殊出生率2を超えるためには子育て支援制度が充実していないと難しいのではないか。

首藤委員) 郡山市の委託でファミリーサポートセンターを運営している。子育てのサポートが欲しい人とサポートできる人に会員になってもらって、1日のうち数時間子どもの面倒を30分300円でみてもらうという制度の仲介をやっている(料金は委託者が直接受託者に払う)。微妙な料金設定なのでなかなか広がらない面があり、改善を提案しているが。

座長) 経済産業省で地域通貨というものを普及させようとしたことがある。ボランティアの対価を地域通貨で支払ったり受け取れる制度。なかなか現実にはむずかしい。ベビーシッターや家事支援がないと3人目は難しい。

首藤委員) 郡山市には祖父母に子育てを助けてもらっている親御さんが多い。そういう方と核家族世帯では格差がある。核家族の親には一時預かり等のサービスを提供しているが、有償にせざるをえない。子育て世帯の経済状況を考えるとベビーシッターを頼むのはむずかしい。ファミリーサポートセンターの料金を安くすることで助けられる人はいる。

座長) 一方で郡山は今でもいいという議論もあって、人口を維持するために女性は25歳になったら結婚しろという条例を作るわけにはいかないの、人口が減るのは既定のこと。人口が減っていく中でいいまちを維持できるかということ。農業をやっていれば食べる人が減れば売れなくなるということもあって、商業のまちとしては問題だという声もある。

藤田委員) 郡山に関して言えば特産品というのは特にないが、逆になんでも作れるということでもある。他の地方都市だと大都市圏への供給をしなければならぬので影響は大きいのかもしれないが、郡山市で生産している農家としては30万人から20万人に人口が減ったとしても、地産地消の流通のシステムさえあればやっていける。以前、地産地消の取り組みとして学校給食を全て地元産の農作物でやったが不評だった。農作物には旬というものがあって、地元産だけでは美味しい食材が揃わない。姉妹都市とマッチングしてやればよい。

座長) 本部委員に伺いたい。郡山は何のまちかと聞かれる。いろいろいいものはあるが、観光案内所でいいところを聞くと特にないと言われた。外から見てもどこがいいと思うか。

本部委員) 初めて外から来た時に、高速道路が真ん中にあることと新幹線が通っているところということしか考えられなかった。通うようになってからは道が整備されていてわかりやすいと思った。

座長) そういう視点は新鮮。しかしそれで住もうということになるか。

本部委員) 実際に事務所を借りている。福島県で活動する拠点としては便利。

座長) 「音楽のまち郡山」は外からみてどう見えていると思うか。

本部委員) 通い出して4年くらいで初めて知った。他にも例えば、今なら駅に案山子が飾られていたり、須賀川の幕が出ていたりしていろいろなものを取り入れているのは分かる。郡山市は周辺の都市と比べて行政のサポートが充実している。福島県全体で見ても震災の影響もあるのだろうが手厚いサポートがある。

座長) 理解できている人が少ないのではないかと思うくらい色々補助金がある。

本部委員) 羨ましいくらい充実している。

座長) 先ほど本部委員から経営者のレベルを上げる必要があるという話があったが、私もそのような持論を持っている。地方都市というのは突出した企業というのは少なく、同じような仕事をシェアする傾向があって、東京からみて大きな会社がないように見える傾向がある。経営者のレベルが高くなくても暮らしていける平和なまちだったのかもしれない。

本部委員) 地域ネットワークで事が足りてしまうのが不思議だった。東京を見て羨ましいと思いつつも、地元の間人間関係もあるのでこじんまりとやってしまうところがある。

座長) なかなか難しいところ。最後に一つ思っていることを言うと、市役所の職員は市民サービスのことは考えるが、東京都民を呼ぼうという視点がありません。例えばカルチャーパークのジェットコースターも世界に一つしかないものを作るのではなくて、他にもあるものを作って市民が他に行かなくてもいいようにしたいと考える傾向がある。そろそろ突出した〇〇のまちというのを打ち出す必要があるということで地方創生の戦略会議の意味があると思っている。事務局には迷惑をかけるかもしれないが、意見を整理していただいた上で次回以降議論を深められればと思う。最後に言い残したところがあれば。なければ事務局にお渡しする。

○その他

事務局) 第2回有識者会議は7月27日の13:30からを予定している。

○閉会